

審査員としてこの一年を顧みて

時 田 郁

論文と名のつくものをはじめ書いてしたのは、宮部金吾先生の教室で卒業論文を書いた時である。タイプもしない下手な字の草稿を真赤になるほど先生は筆を入れて下さった。その後も論文を書く毎に、名誉教授になられた先生に目を通していただいた。印刷にまわす前にはレーン先生に見ていただいた。その行き届いた校閲には感心もし教えられもしたが、謝辞にレーン先生の名を挙げることはなかった。頼まれて論文の校閲をしたことも多く、邦文、英文ともに、第三者が読んでわかり易いように遠慮なしに筆を入れることにしている。科学論文は文芸作品とはちがうのだから校閲者の考えによって筆を入れて良いし、入れられても気にする必要はない、と私は思っている。「藻類」の投稿審査員になれということで、この一年数編の原稿を拝見したが、その感想を書けとのことであるが、拝見した原稿には例によって遠慮なしに筆を入れ、意見を書いたつもりである。私なりに責任をもって最善をつくして、実をいえば余り面白くもないひとの原稿を、すみずみまで読んでいるつもりである。校閲を一度すればあとは著者にまかせて良い管であるが、編集幹事のお考えで、清書し直した原稿を再び送ってくることもある。はじめの加筆した原稿のコピーと一緒に採用されたか、されないかがわかる。採用の如何は全く著者の自由であるとはいえ、こうして再度送られて来た原稿を、またすみずみまで読まされる身になると、感想は複雑なものがある。

編集幹事としては、指導者に対する謝辞が記してある原稿は一応その校閲を経たものと考えのだが、一読してみると、時には審査員へ送ることがあるという。単なる儀礼的謝辞か、指導者が十分な校閲を怠っているのではないかと疑われる場合で、「藻類」の体面を考えての幹事の自主的判断によるという。そうした苦心と悩みがあることを知って同情を覚え、職責に対する真面目な姿勢と努力に対しては敬意を表する者である。

学術雑誌の編集局 Editorial Staff (編集陣)には雑務担当の幹事のほかに、審査、校閲の責任を担当する権威ある委員の常置が望ましい。その名簿を見ればその雑誌の権威が評価されるようでありたいものである。実際に責任を遂行する委員は任期を切らず常任とし、名儀だけの委員は直ちに交替すべきである。

「藻類」の親睦的、アマチュア的性格への要求は、そういう軽い報文を載せる欄を常置することによって満たされると思う。そういう報文を論文にでっち上げようとするところに無理が生ずる場合があるのではないだろうか。

宮部先生にこういうお話をうかがったことがある。或る人が久しぶりに先生をお訪ねしたとき、その人の論文が話題となり、先生に贈呈してある別刷を出していただいて、いそいそと頁をあけて見たとたん、「その人がいやあな顔をしてねえ。だってその文章が間違

いただけでひどいものだから、わたしが読んだとき鉛筆で消したり書き込んだりしたそのままだったんだよ。そういう別刷がよくあるよ。せっかく苦心して出来た論文である。どこへ出しても、さほど恥しくないものにしたものである。推敲は勿論、校正もさることながら、校閲を軽んじないようにしたいものである。(現住所〒248 鎌倉市十二所783)